新たな臨地実習に向けた臨地実習指導者としての取り組み

◎畑 諒祐[1)]、西 沙智圭[1)]、村田 優[1)]、佐藤 信浩[1)]
大阪赤十字病院[1)]

【はじめに】
臨床検査技師学校養成所指定規則の改正に伴い、当院では令和6年度の臨地実習において、改正事項を踏まえた臨地実習が開始される。新たな臨地実習の開始を目前に控え、臨地実習指導者としてのこれまでの取り組みについて報告する。

【取り組み内容】
①改正内容の周知：臨地実習指導者講習会終了後、当院検査部役職会議において講習会の内容を説明し、検査部全体への周知を行った。②実習日程表の作成：従来所属長が作成していたが、臨地実習指導者が作成するように変更し、部門の特性や連携も考慮した日程を組むようにした。
③実習開始前の面談：当院では実習開始前に養成学校教員と実習生が来院され、所属長と面談を行う機会がある。実習に向けた心構えの確認や、緊張を和らげる等の目的で臨地実習指導者も同席し、さらに前述の日程表を事前に配布することで実習のイメージが湧くようにした。④実習指導者による中期・期末面談の実施：実習開始後にも面談を行うようにした。重視している点として、中期では進捗の確認や実習が過度の負担になっていないかに気を配り、期末ではアンケートを実施し、実習の振り返りと改善点の洗い出しを行った。⑤実習内容の見直し：臨地実習指導者講習会テキストを参考に、まず血液検査部門において実習内容の見直しを行い（西ら、第72回日本医学検査学会発表）、他部門からの参考になるようにした。現在、他部門においても実習内容・指導方法の調整を行っている。

【考察・まとめ】
実習生によるアンケート結果からは問題点（自習が多い等）も見つかっており部門へのフィードバックに繋がっている。学校では学びえない「臨床」を伝える臨地実習の実践を目標に取り組んできたが、実習期間の大幅な延長も予定されており現場の負担増加も無視できない。臨地実習指導者は検査室と実習生との橋渡し的なポジションとして、双方に有益な臨地実習の在り方について模索する必要がある。

連絡先：06-6774-5111(内線2734)